

『日陰者ジュード』における ハーディの「女のことば」と「男のことば」

野村 京子

1 はじめに

周知の如く、1973年アメリカの言語学者、ロビン・レイコフ(Robin Lakoff)は英語と性差研究に画期的な仮説を発表した。レイコフによると、女性が日常何気なく使っている言語が、実は男性中心社会で差別された女性の心理を反映したものである、ということだ。すなわち、女性の社会的に低い地位と女が使うことばとの間の相対関係を指摘しているのである。現在、このレイコフの仮説は多くのフェミニストの批判を浴びているが、本稿では、レイコフの仮説の是非を問うのは論から逸れるゆえ、このレイコフ論を前提に論じる。

レイコフの女性語の指摘以来、二十年以上経った今日では、「アメリカでは女性が女性語を使わなければならない時代は過去と化している。(メイナード・K・泉子¹⁴)と女性語の解放が指摘される。アメリカで女性語が実際に解放されたかどうかは、今後の研究課題であるが、言語が性差のない方向に変化していることは確かである。それだからこそ、こうした性差からの女性語研究の現状を踏まえうえて、女性の抑圧、差別された地位と言語の相対関係を時代を遡って再考することもまた、今後の女性語研究の発展のために必要ではなかろうか。

本稿では、女の言葉を考察するケース・スタディとして、家父長制社会で女性を差別、抑圧したヴィクトリア朝後期を代表する小説、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の『日陰者ジュード』(Jude the Obscure 1895)を取り上げる。この小説を取り上げた第一の理由は、スー(Sue)とアラベラ(Arabella)と云う二人のヒロインの対照的な生き方が19世紀末イギリスの社会に生きた女性の姿を反映しているからである。スーは因習的な社会に反逆

する「新しい女性」である。だが彼女は理論では進歩的であるが、行動は理論に反し、社会が期待する「慎みある女」の枠から抜け出せない。他方、アラベラは粗野で、下品であるが、男の犠牲にならないたくましい女として生き延びる。だが、彼女は常に男に依存し、男を利用するだけで、女の自立をめざさない。端的に言えば、両者とも、個性の違いがあっても、この時代の家父長制の枠から抜け出せない女性であり、「強さ」と「弱さ」を同時に内包している。この矛盾は、ヴィクトリア朝の抑圧された女性の立場をそのまま反映するものである。第二の理由として、ハーディの女性に対する視点があげられる。彼はリアリストの眼で時代に翻弄される女性に共感を持って、苛酷な女の現実を描写するが、根底には、女性を「弱い性」と見る伝統的な男性作家の視点を払拭していない。

本研究では、対照的な女性であるスーとアラベラの矛盾がどのように言葉の中に表現されているか、同時に、ハーディの戦略の一つとして、女の言葉と男の言葉が「女らしさ」、「しとやかさ」のイメージ作りに一役買い、読者に訴える要素になっているかを分析することで、この作品の男と女の相対関係を考察する。加えて、二次的目的として、女性の解放を期待する一方で、「女はこうあるべき」という男性主義的な言葉のなかに女性を押し込めたハーディの矛盾を考察する。

2 作品と時代背景

本論に入る前に、『日陰者ジュード』とヴィクトリア朝について簡単に述べたい。『日陰者ジュード』は、ハーディの最後の小説となったいわくつきの作品である。というのは、この小説は出版と同時に非難と中傷的になり、結果として、彼は小説の筆を折ることになったのである。非難の最大の理由は、偽善的な、上品ぶったヴィクトリア朝社会に対する彼の痛烈な批判が中産階級の道徳観に抵触したためであった。

この作品のテーマは、貧しい石工ジュード(Jude)の学問への憧憬と挫折であるが、また、いわゆる「新しい女性」の解放と挫折という問題をも提示し

ている。「新しい女性」とは、フェミニズム運動を背景に、19世紀末のイギリス社会に台頭した女性の解放を求める「目覚めた女性」の呼び名である。彼女たちは、「女は慎み深く、女らしく振る舞うべき」という社会通念を打破するために、社会慣習に反逆し、「女らしくない」振る舞いで、世間を震撼させた。では、こうした「新しい女性」を生んだヴィクトリア朝とはどのような時代であったのか。

ヴィクトリア女王が君臨していた19世紀半ばから末にかけて、イギリスは、国力が未曾有の発展を遂げた時期であり、その発展の担い手は中産階級層であった。彼らの間では、〈家庭の天使〉と呼ばれている良妻賢母型の女性が理想像として広く浸透していた。ゆえに、〈家庭の天使〉という美名のもとで、女性は男性の隷属下に置かれ、公的領域から完全に排除されたのである。さらに、ヴィクトリア朝を語るにあたって、避けられないことは、中産階級の人々が、前例をみないほど、「性」を嫌悪し、抑圧したことである。

「性」(sex)に関わる言説がタブー視されたことは、言うまでもない。「上品で、慎み深くなければならない」という脅迫観念は女性たちを呪縛し、囲いに閉じ込めたのである。しかし、世紀末において、時代の流れは確実に女性の解放を要求する方向へと向かっていた。時代の要請に答えて「新しい女性」が現れたと言える。

全体として、ヴィクトリア朝社会の大きな特徴は、二つあげられる。一つは、繁栄を象徴する中産階級と社会の底辺に生きる下層階級との間の断絶である。中産階級層は、自分たちの地位の安定のために、服装、住居等の生活様式だけでなく、言葉の用語においても下層階級と距離を置いた言い方を固守した (R. A. Spears 14)。もう一つは、前述したように、厳格な性道徳である。特に、女性の純潔に関する世間の眼は厳しく、服装と言葉を含む作法がだらしなければ、品行もだらしないと見なされ、「墮落した女」と烙印が押されるのである。ゆえに、女性は常に「レディらしく」振る舞うことを要求され、強制されていた。では、「レディらしい」言葉、「レディらしくない」言葉はテキストでは、どのように表現されているかを、具体的に検討したい。

3 アラベラとジュードの関係 — 〈したたかな女〉と〈弱い男〉

一般的に、英語は日本語に比べて性差が少なく、明確な形をとらない。しかし、レイコフは英語にも「女ことば」があり、その特徴は社会的に差別され、劣等視されている女性の心理から来るものであると主張している。レイコフは「女ことば」の語彙的特徴として、(1)女性に特有の興味に関する語彙、(2)意味のない形容詞(divine, cute)、(3)上昇イントネーション、(4)垣根表現(well, kinda)、(5)強調表現(so)、(6)文法に忠実、(7)付加疑問文、(8)罵り語、下品な言葉の忌避、(9)ユーモアの欠如、(10)丁寧表現、を挙げている。この章では、このなかの丁寧語と罵り言葉に焦点をあて、分析する。

(1) 反丁寧語である断定、命令表現

零細な養豚農家の娘アラベラは、下層階級に属し、女の生きる道は結婚以外にないという当時の女性の生き方を踏襲する。肉感的な肢体を武器にひたすら独学に励むジュードを誘惑し、偽りの妊娠を口実に陥落させる。一方、ジュードは、誠実さゆえに、世間一般の男のように若気の過ちで関係を持った女を捨てることもできない。結果的に、彼は愛のない結婚をする。当然なことに、現実の結婚生活はアラベラの打算的で、自己中心的な夢を打ち砕く。見習いであるジュードの薄給は経済的逼迫を生じさせ、同時に夫婦関係を悪化させる。そのような状況の中で、生活を維持するために飼った豚を二人の手で殺す場面は彼らの絆の脆さを示唆するものであり、同時にその後の別離の伏線になっている。

例1 飼っていた豚を殺す際の夫ジュード(J.m) と妻アラベラ(A.f) の会話
(下線は筆者)

J.m: "Upon my soul I would sooner have gone without the pig that
have had this to do! A creature I have fed with my own
hands."

(やれやれ、こんなことをさせられるくらいなら、いつそ豚なんか飼わなきゃ良かった。この手で餌をやって育てたものを。)

A. f: “Don’t be such a tender-hearted fool! There’s the sticking-knife — the one with the point. Now whatever you do, don’t stick up too deep.”

(そんな気の弱い馬鹿なこと云っちゃ駄目よ！　これが刺しナイフよ—先の尖った方よ。どんな風にやってもいいけど、ただあんまり深くつき刺しちゃ駄目よ。)

J. m: “I’ll stick him efectually, so as to make short work of it.”

(手間どらないように、狙いよく突き刺そう。そこが肝心だ。)

A. f: “You must not! The meat must be well bled, and to do that he must die slow ...He ought to be eight or ten minutes dying, at least.”

(だめよ！　肉から血を充分出させなきゃ駄目なの、それには死ぬ時間を引き延ばすようにしなければ駄目なのよ。(中略) 少なくとも八分や十分ぐらいはかけて殺さなくちゃ駄目だわ。)

この対話でわかることは、アラベラが断定、命令を意味する ‘must’ ~しなければならない)、または命令形を頻用していることである。助動詞 ‘must’、或いは、‘must not’ は話し相手に使われる場合、強い命令、禁止を意味する。ここで、アラベラはジュードに何度も命令口調で、豚の刺し方を指示している。命令表現に関して、レイコフは「あからさまな命令は、話し手自身の方が相手に対して地位が上であるという前提を表現している。したがって、〈自分には相手の応諾を強いる権利がある〉という意味を伝えている」(31) と定義したうえで、ゆえに、男より地位の低い女は ‘Please’ とか ‘Will you’ のような丁寧表現を多く使うと述べている。この観点からジュードとアラベラの関係を見ると、この時代の男性の支配、女性の隷属というステレオタイプな図式から外れていることがわかる。断定表現を使うことで、アラベラは自分の意思を明確に相手に伝えるだけでなく、ジ

ユードを支配下に置いている。

この場面のアラベラのリーダーシップは、その後の物語の展開に於いても変わらない。ユードの生活力のなさや学問を捨て切れない夢に見切りをつけると、ユードを捨てオーストラリアへと移住してしまうが、帰国して経済的に困ると、彼を頼る。金銭的にはユードに依存しながらも、夫婦間のヘゲモニーはArabellaが握っているという矛盾は、ふたつの問題を提示している。ひとつは、社会的にも経済的にも女性の自立が難しい状況のなかで、Arabellaのようなたくましい女性でも貧しい農村生活から抜け出す一つの手段としては、男を利用し、依存する以外とるべき道はなかったことである。もうひとつは、世紀末になり、男性中心の家父長制を基盤とした社会がフェミニズム運動の余波を受け、徐々に変化し、男性の地位に揺らぎが生じ初めていることである。

(2) 罵り語と下品な言葉

例2 例1の会話に続く。ユードは一息に瀕死の豚を殺す。

A. f: “Od damn it all! that ever I should say it! You’ve over-stuck un! And I telling you all the time.”

(こん畜生！ いまいましたら！ 刺し過ぎたよ！ あんなに云っておいたのに。)

J. m: “Do be quiet, Arabella, and have a little pity on the creature!”

(静かにしろ、アラベラ、少しはこいつを可哀そうだと思え！)

(中略)

A. f: “Make un stop that! Such a noise will bring somebody or other up here, and I don’t want people to know we are doing it our selves.”

(鳴き声を止めさせて！ そんな声をたてると誰かが来るわ。私、自分たちでこんなことするの知られたくないわ。)

(中略)

J.m: "It is a hateful business!"

(厭な仕事だ!)

A.f: "Pigs must be killed."

(豚は殺されるもんだわ。)

レイコフによると、女性は、Oh dear! (あらまあ)、Goodness! (まあ)、Oh fudge! (まあ、いやね)、など柔らかい感投詞をよく使い、男性は、Damn! (畜生)、Shit! (くそ) などの強い感投詞を使うという。しかし、ここでは、一般的に女性が使わない粗野で下品な感投詞 'Od damn' をアラベラは使っている。'Od damn' の 'od' は 'god' の 'g' が抜け落ちた語で、イギリスの古語である。『英語スラング辞典』には、この語は1900年代半ばまでは冒瀆的とまではいわなくても、ばちあたりな言い方と考えられ、中層階級の人の使う一番強烈な罵り語であった、と記述されている。当時、実際にどのような階層の女性がこの言葉を使ったかは分からないが、前述のように、現代よりはるかに男女の領域が区分されたヴィクトリア朝が、男は「男らしく」、女は「女らしく」振る舞わなければならない時代であったことを考慮すれば、この罵り語、'od damn' は一般の女性が絶対に避けなければならない卑語であったと推察される。「社会の男女の不平等が女の言葉に反映して、女は弱い虚辞表現を使う」(16)というレイコフの説に従えば、アラベラが男に許される下品な言葉を口にすることは、レディにふさわしくない粗野な女であり、自己を主張する強い女であることを裏づける。この罵り語をアラベラに使わせて、ハーディはレディに属さない女に彼女を位置づけている。また、私たち現代の読み手も、この罵り語からアラベラを下品な女と判断する。それは、いみじくも下品な言葉はレディにふさわしくないという19世紀的な社会の偏見がいまだに残存しているからである。

この罵り語の使用には、性差だけでなく、彼女の生まれ育った農村文化の影響があることも見逃せない。女性を家庭の飾り物的存在に置いた中産、上流階級の生活と比較して、農村では、女も男と同じく一家の働き手であったゆえに、「女らしく」という意識にあまり捕らわれていなかったのではない

か。屠殺作業は、ジュードには非人道的な行為と捉えられるが、アラベラにとっては、生活の糧を得る重要な仕事である。この会話からわかることは、二人の生きる価値観の相違と、同時に、豚を殺すことも満足に出来ない男、ジュードに対するアラベラの非難と軽蔑の気持ちである。

ジェニファ・コーツは罵り語に関して、「罵り語を男性が多く使うという民族言語学的信仰が広く行き渡っているが、罵り行為に性差が存在することを示す確固とした証拠はほとんどない」とレイコフに反論している(25-26)。コーツの指摘するように、この場面の文脈から捉えたかぎり、罵り語を使う背景には、単に性別だけでなく、話し手の社会的、文化的要素が含まれていると判断される。

アラベラの罵り語は別の場面でも使われる。再婚した夫が死に、喪に服しているアラベラは、ジュードとスーの睦まじい様子に、嫉妬心を掻き立てられ、ジュードへの情欲が再燃する。

例3 アラベラ (A. f)と幼なじみアニー (An. f) との会話

A. f: "He's more mine than hers! What right has she to him, I should like to know! I'd take him from her if I could!"

(あの人ったら、彼女のものよりあたいのものだよ。彼女がいったいどんな権利を持っているというのさ、聞いてみたいよ。いっそ取り返してやろうか。)

An. f: "Fie, Abby! And your husband only six weeks gone! Pray against it!"

(あきれた、アラベラ。旦那を亡くして六週間経ったばかりだに。お祈りをしてふしだらを追っ払うんだよ。)

A. f: "Be damned if I do! Feelings are feelings! I won't be a creeping hypocrite any longer — so there!"

(お祈りなんか金輪際まっぴらだわ。熱い思いは熱い思いさ。煮えきれない猫かぶりなんぞ土台あたいの性に合わんのさーざあまみやがれ!)

‘Be damned’は強い否定を意味する語であり、‘so there’は「本気だ」「わかったな」という意味で、どちらも俗語(slang)である。スピアーズは、スラングを次のように特徴づけている。(1)はなし言葉に使われる。(2)下位集団、特に、若者が使う。(3)社会的地位の高い人には避けられる。(4)攻撃的、ワイセツなスラングは、男性集団の中では攻撃感情を向け、男らしさを認めさせる。アニーは、同性であり、昔なじみであるので、彼女にたいしてはアラベラはレディらしく見せかける必要もなく、粗野な生地をさらけ出す。スラングを使うことで、アラベラのあけすけな表現は卑俗さが増幅されるが、農村出という同じコミュニティに属する女たちの一体感がふたりの会話に反映されている。また、先の断定表現と同じように、アラベラの率直さがここでも強調される。

以上のように、女性が回避する傾向である男の言葉の使用は、アラベラのパーソナリティを鮮明化し、アラベラ像の理解を容易にする。ハーディは戦略的に、男の言葉を使うことで、田舎育ちで、教養がなく、粗野であるが、自分の感情や考えを率直に表現できる強い女としてアラベラを描くことに成功している。ゆえに、アラベラとジュードの夫婦の関係においても、ヴィクトリア朝の家父長制に依拠する夫>妻の支配関係ではなく、夫<妻という夫婦関係の逆転現象が見られる。そこには、単に「男だか強い」、或いは、「女だから弱い」という性差の範囲を越え、人間の「生きる」力の強さと弱さが垣間見られる。

最後に、アラベラに関して付け加えたいことは、「豚を殺しているのを他人に知られたくない」という言葉の意味の重要性である。豚の屠殺は古来からイギリスの農村では農家の仕事のひとつで、中世の版画の中にも夫婦が協力して豚を殺し、その血を鍋に受けている描写を見ることがある。しかし、18世紀の半ば以降、近代化の波が農村に押し寄せてきてから、伝統的な農作業は専門家に任されていくようになる。それと共に、都会の中産階級の上品さをみならう風潮が農村に徐々に浸透していく。このことは、農村文化を疲弊させ、都会文化への憧憬へと農村の人々を駆り立てる要因になっている。ゆえに、アラベラのような粗野な女でも、世間からは、豚を殺すことも厭わ

ない農村の下層階級出身ではなく、都会風のレディのように見られたいと思うのも無理からぬことである。貧しい現実からの脱出は若く魅力的なアラベラの夢であり、その夢の実現のためには世間の評判は大事なのである。だが、アラベラは自分の力で自分の夢を実現するのではなく、常に結婚の形式で、男に依存し、男を踏み台にして生きる。この点に、アラベラにも時代を越えられない弱さがあると言える。

4 「新しい女性」スーの新しさと古さ

(1) 男の言葉の借用

アラベラの対極の位置にあるスーは、世紀末の「新しい女性」の特徴である〈知性〉を持つ女性である。彼女はギリシャ・ローマの古典文学に造詣が深く、それはジュードとフィロットソン(Phyllotson スーの夫)をはるかに凌ぎ、彼らの賞賛の的になる。彼女の知識は、この時代の女性が学問とは無縁の場である家庭で、良い妻になるための教養小説を読む程度のもとはかけ離れている。しかし、スーはそれらの古典を原書で読んではいない。つまり、古典をラテン語やギリシャ語で読む教育は受けていないのである。ヴィクトリア朝の女性の教育が「家庭の天使」の育成に重きを置いていたことは言うまでもない。

19世紀のイギリスの大学は、エリート男子の世界であり、女子が大学に入学できるのは20世紀まで待たなければならない。学問の世界の公用語であるラテン語は男性、それも中産階級以上の教育のある男性のみに許される言語であった。その意味で、ラテン語は性差だけでなく階級を象徴するものでもあった。ゆえに、男であっても、ジュードは赤貧の暮らしのなかで、独学でラテン語を習得するが、下層階級出身という理由で大学入学を拒まれる。それに対して、スーはかつて同棲していた大学生から古典書の教養を受けるが、それは翻訳をとおして会得したものである。テキストでは、ジュードの学問への熱情と涙ぐましい努力は詳細に描写されているが、スーに関しては結果だけで、学ぶ課程には全く触れられていない。ゆえに、翻訳からの知識

であるにもかかわらず、ジュードやフィロットソンの彼女の知識にたいする賞賛の言葉の裏には、「女にしてはすごい」という差別意識が窺える。

ハーディはスーに知識を賦与しているが、彼女の知識は男の思想、論理に立脚している。言い換えると、ハーディは自分の男性論理をスーに投写しているのだから、彼女の知識は、スー自身の女としての経験・体験から生まれたものでない。それゆえ、彼女の言葉をとおして表現される彼女の思想は観念的になり、説得性に欠ける。そのことは、男女の結びつきを結婚という形式においてだけ容認する社会、宗教を激しく批判するスーの言葉が、19世紀半ばの思想家であり、女性解放論者である、J.S. ミルからの借りたものであることから明白である。以下の例は夫のフィロットソンと彼に離婚を頼むスーとの会話である。

例4 離婚を頼むスー(S.f) と夫フィロットソン(P.m) との会話

P.m: "And do you mean, by living away from me, living by yourself?"

(それじゃ、わたしと別居して、お前独りで暮らすつもりか。)

S.f: "Well, if you insisted, yes. But I meant living with Jude."

(さあ、もしあなたがそうしろと主張なさるつもりでしたらね。でも、わたしは、ジュードと一緒に暮らすつもりでしたの。)

P.m: "As his wife?"

(彼の妻としてか)

S.f: "As I choose."

(そりゃわたしの勝手よ。)

(中略)

S.f: "She, or he, 'who lets the world, or his own portion of it, choose his plan of life for him, has no need of any other faculty than the ape-like one of imitation'. J.S. Mill's words, those are. I have been reading it up. Why can't you act upon them? I wish to, always."

(女にせよ男にせよ、『一生の方針を選ぶのに、世間または自分の関係している世間の一部分にその選択を委ねて置くならば、猿のような模倣能力の外に、なんらかの能力も要らない。』これはJ. S. ミルの言葉よ。本で読んで見つけたんだけどー。なぜあなたはミルの言葉通りに行動できないの。わたし、そんなふうに行動したいと思ってるの、いつもいつも。)

P. m: “What do I care about J. S. Mill! I only want to lead a quiet life!”

(J. S. ミルなんかどうだっていい。わたしはただ、乱されない静かな生活を送りたい。)

スーは愛していないフィロットソンとの形だけの結婚生活に終止符を打つ決意をするが、相手のフィロットソンの方は、夫として妻に最善を尽くしてあげたと思っているので、スーの離婚の要求をすんなりと受入れることは出来ない。当時のイギリスでは、離婚法がやっと認められたばかりで、離婚は現在よりはるかに難しいことであった。特に、結婚の他に生活手段のない女性にとっては、離婚は死活問題であったし、また、夫にとっても、妻を離婚するということは世間の非難を浴びる格好の材料であった。要するに、離婚は夫婦ともどもに社会的な名誉、地位の喪失をもたらしたのである。

スーはミルの言葉を引用して、個人の選択の自由を主張するが、フィロットソンの気持ちを少しでも理解できたならば、自分がなぜ家を出るかという理由を心から湧き出した言葉で、相手に訴えなければならぬであろう。家庭の破壊という深刻な状況のなかでミルを引用することは、相手を傷つけるこそしろ、自分の気持ちを相手に充分に伝える言葉にはならない。スーの論理は西洋の「知の世界」を支配した男性の論理を模倣したものに過ぎない。D. スペンダーの言葉を借りれば、「言語は、男によってつくられ、男の目的に合わせて作られてきたものである」(88)。つまり、西洋において、古来から男性中心的な原理に支えられてきた言語体系は、男を中心に置き、女を周縁へと追いやり、女の言葉に抑圧的な沈黙を強いてきたのである。ゆえに、

自分の考えを女の言葉で表現できないスーは、最終的には、沈黙を強いられる。

(2) 沈 黙

話は前にさかのぼるが、イエルサレムの模型展示場での校長フィロットソンと助教論となったスーとの会話を検討してみよう。

例5 結婚前の校長フィロットソン(P.m)と助教論スー(S.f)の会話

S.f: "I think that this model, elaborate as it is, is a very imaginary production."

(この模型は丹念にできていますけど、ひどく空想的なこしらえ物だとおもいますわ。)

(中略)

S.f: "I fancy we have had enough of Jerusalem, considering we are not descended from the Jews. There was nothing first-rate about the place, or people, after all —as there was about Athens, Rome, Alexandria, and other old cities."

(私たちが何もユダヤ人の子孫なんかじゃないことを考えると、イエルサレムなんてもう結構っていう気がしますわ。結局、イエルサレムという場所にも、ユダヤ人という民族にも、第一級のところがひとつもありませんのね—アテネや、ローマや、アレキサンドリアのような他の古い都にまつわりついてた要素が一。)

P.m: "But my dear girl, consider what it is to us!"

(しかしねえ、きみ、それが今のわれわれにどんな意味をもってるか考えてみたまえ。)

She was silent, for she was easily repressed.

(スーは、苦もなく抑えつけられて、口をつぐんでしまった。)

この会話はスーのキリスト教批判についてである。キリスト教にたいする

懷疑は、スーでなくても、この時代の知識階級が、多かれ少なかれ、抱いていたものである。事実、ハーディ自身、深い懷疑心にとりつかれていた作家である。だが、女であるスーが口にする、それは論議の対象にならず、神を冒瀆する異端者であると非難されるのである。スーは、自分の主張を押し進めることもできず、言葉を失う。スーの沈黙はこの場面だけでなく、テキストでは何回も描かれる。これもハーディの戦略の一つである。ハーディは、知の世界に踏み込んだ「新しい女性」の知性、教養が男性が作りあげてきた文明を踏襲したものであり、それを越えられない程度のものであることを皮肉っているのである。

自分で積み重ねた思想とそれを表現する言葉を持たないということは、一見、理論では進歩的だが、行動となると、理論とそぐわない点をスーは暴露することになる。彼女は社会の因習などに囚われていないような言葉を吐くが、その実、世間の眼を気にし、脅えている。それは、レディとして「上品ぶる」社会風潮が彼女のなかにしっかりと染み付いているからである。彼女がいかにかレディにふさわしい女の言葉を使っているかを見てみよう。

(3) 付加疑問文

レイコフは、女性は男性に比べて断定を避ける傾向があるため、付加疑問や丁寧表現を多く使うという見解を示している(28-29)。スーとジュード、スーとフィロットソンとの会話、また、アラベラとジュードとの会話から付加疑問をリストアップした結果をみると、スーは19回、ジュードは5回、フィロットソンは1回、アラベラは2回と、圧倒的にスーが多く用いている。付加疑問の意味が状況によって異なる例として、レイコフは次の例をあげて、女性が使う傾向がある付加疑問文を説明している。

例 The way prices are rising is horrendous, isn't it?

(物価の上昇がすさまじいですね。)

この文には、相手の確認を得る場合だけでなく、話し手の頭のなかには、

イエスかノーという答えがあるのだが、「それをはっきり言うのに躊躇している場合」に使われているとのことだ。言い換えれば、力の無い言葉でもある。では具体的に、スーの使う付加疑問文のなかから次の例文の意味を分析する。

例 6

(1) I fell asleep, didn't I?

(わたし眠り込んでしまったんですね)

(2) You called me a creature of civilization, or something, didn't you?

(あなたはわたしのことを近代文明の産物とかなんとかおっしゃたわね)

(3) I shall walk down the church like this with my husband in about two hours, shan't I?

(もう二時間ほどたつと、わたし、この教会を夫と一緒に、こんな風にして出てくるんですわね)

(4) You do care for me very much, don't you?

(あなたはわたしをととても愛してくださるわね)

(5) You won't be angry, will you?

(あなたは怒らないでしょうね)

(6) You don't hate me, don't you?

(わたしを憎んでなんかいらっしやらないわね)

例文の(1)～(5)はジュードに対して、(6)はフィロットソンに使われた付加疑問文である。そのなかで、(1)(2)(3)は相手に確認を求めているものである。(4)(5)(6)は、それとは意味が異なっている。(4)の場合は、結婚したフィロットソンと別れ、恋人のジュードと暮らす決意をしたスーだが、ジュードとの性的関係を持つことを拒否する。馬鹿にされたと怒るジュードに発せられたことばである。(5)は、ジュードと別れ、再度フ

フィロットソンと結婚したスーを非難するジュードに向かって、(6)はスーが家を出た後、心労で病に臥したフィロットソンにむけられたことばである。(4)(5)(6)の付加疑問文には確認の意味だけでなく躊躇する気持ちが含まれている。躊躇はスーの特質の一つである。彼女はジュードやフィロットソンに対して感情的に残酷な振る舞いをするが、同時に自分のとった行動が相手を傷つけ、苦しめたことに常に苛まれる。「残酷さ」と「やさしさ」のくり返しは、彼女の性格の一部を物語るものだが、結果的には、行動と理論の不一致という矛盾を引き起こす。したがって、彼女の言葉の調子には自信のない、おずおずとしたためらう感情がこもり、力強さに欠ける。しかし、裏を返せば、力の無い付加疑問文は相手の気持ちを和らげ、彼女に向けられる攻撃をかわす役目を果たしている。以上のように、付加疑問文は婉曲表現として女性を上品なレディにイメージ化するのに貢献し、ハーディの語りの戦略として成功しているのである。

5 男が女を呼ぶ時のことば

(1) 呼びかけ語 (little) — 親愛を意味する場合

これまで、女の使う言葉は、女の社会的な地位を反映したものであるという面から論じてきた。しかし、女の地位を語るにあたってもう一方の性である男性が女性を表現する際、どのような言葉を用いてきたかを検討しなければならないであろう。レイコフは、この点に関しても女性を指すさまざまな言葉が、性差を意味し、差別化されているかを論じている。ここでは、レイコフの説を踏まえた上で、このテキストのなかで、男性がどのような言葉を用いて女性を男性より劣った者としてレッテルづけしているかを検討する。

最初に、‘little’を論じる前に、同じく呼びかけの言葉である‘dear’を分析する。

O. E. D. では、‘dear’は人に話しかける時、愛情または尊敬の意味をもって使われると定義されている。この作品のなかで見ると、‘dear’はジュード対アラベラ、ジュード対スー、スー対フィロットソンの会話に

において、この意味で使われている。19世紀のイギリスでは、現代より ‘dear’ は一般的に使われていたようだ。ジュードとアラベラの関係においても、結婚前後の段階では少なからずアラベラに愛情を持っていたジュードは、‘my dear’ または、‘dear Arabella’ と ‘dear’ の呼びかけ語を頻繁に使っている。だが、アラベラのジュードに対しての会話をみると、彼女は全く ‘dear’ を用いていない。この理由をはっきりと断定できないが、農村、或いは下層社会では、‘dear’ は都会ほど使用されなかったと推察される。テキストのなかでも、アラベラと父親との会話や、周辺の人々との会話には ‘dear’ は見当たらない。それに対して、スーは話しかける相手にこの親愛語をほとんどの場合に使用している。このことは、スーが都会に住み、職業（教会美術デザイナー、その後、小学校の助教諭になる）を持つ女性であることと関連していると言える。

次に注目したいのは、小説の後半において、ジュードがスーに対して、‘dear’ を ‘little’ に変えていることである。

例7 アラベラとジュードとの間の子供を引き取る決意をするスー(S. f) とジュード(J. m) との会話

J. m: “You must assume about him what is most pleasing to you, my curious little comrade.”

(まあ、子供についちゃ、君の一番気に入るように想像しなさいよ。
物好きなわたしのかわいい同志よ)

(中略)

S. f: “But the other half of him is — she! And that’s what I can’t bear! ...”

(でもあの子の半分は—あの女だわ！それを思うとたまらないのよ。
...)

J. m: “Jealous little Sue!”

(かわいいやきもちやきのスー！)

例8 農業博覧会での幸せなジュード(J.m) とスー(S.f) の会話

S.f: “I should like to push my face quit into them – the dears!

But I suppose it is against the rules to touch them – isn’t Jude?”

(花のなかへこの顔を押し込んでみたいくらいよ。かわいいわね。

でも触っちゃ規則違反になるんでしょうね、ジュード)

J.m: “Yes, you baby.”

(いいさ、ねんねだね)

‘little’ は ‘dear’ とおなじく、親愛呼称であるが、使い方に相違があるようだ。

O. E. D.によると、‘little’ が呼びかけ語になると、「話し手の親愛、軽視、やさしさの意味を含んでいて、また、その語から相手を侮る感情が連想される」と意味づけている。ジュードとスーは、親密な関係になる前は、お互いに ‘dear’ を使っているが、同居し、相手を知り、愛情が増すにつれ、ジュードはスーを ‘little’、‘baby’ と頻繁に呼ぶようになる。他方、スーのこの親愛語の使い方に変化がない。このことは、レイコフが ‘girl’ という語に関して述べていることと関連する。レイコフによると、「大人の女性に使われる ‘girl’ には、若さ、軽々しさ、未熟を想起させるが、その裏には女性は社会の責任ある立場に置かれていない、能力の無い人間であるという意味も含んでいる」(48)とすることである。例文の ‘little’ と ‘baby’ は侮蔑の意味で使われてはいないが、「かわいい」という感情が込められているのが分かる。そこには、対等の関係を保つ男女ではなく、自分の物になったスーを自分の保護下に置くジュードの男性優位の意識が反映されている。

(2) 呼びかけ語 (little) — 侮蔑を意味する場合

この親愛呼称が親しい間柄でない第三者に使われると、侮りの色調が濃くなる。フィロットソンから「離婚の相談を受けた」友人であり校長であるギリングム(Gillingum) のスーに対する言葉は辛らつである。

例9 フィロットソン (P.m) と友人の校長であるギリンガム (G.m) との
会話

P.m: "She's been here since you called last."

(あれから、彼女がここに来た。)

(中略)

G.m: "Ah! You have made it up?"

(ほほう！ 寄りが戻ったね)

P.m: "No. ... She just came, patted my pillow with her little white hand, played the thoughtful nurse for half-an-hour, and went away."

(違う、ちょっと来て行っただけでね。白い小さい手で枕を直したり、しみじみと看護婦の役を三十分ほど勤めたりして帰ってっさ。)

G.m: "Well— I'm hanged! A little hussy!"

(なんてことだ—いまいましい！ あばずれ女め！)

(中略)

G.m: "I mean, what a tantalizing, capricious little woman! If she were not your wife—"

(なんという、人をじらす気まぐれな女だろう、と言うのさ。これがもし君の奥さんでなけりゃ)

ここで使われている 'hussy' (あばずれ女) という語は、O.E.D.によると、語源は 'housewife' から来たものだが、意味は「主婦」から転じて、性的な意味を含み、'woman' に代わる蔑視用語であり、また、'wench' (売春婦) と類語であると定義している。'little' がこのような蔑視用語と一緒に使われると、「可愛い」という意味というよりむしろ侮蔑の感情が含まれる。中産階級の典型であるギリンガムは、夫と家庭を捨て、恋人のもとに走ったスーにこのような侮蔑の言葉を貼ることで、スーを卑しめている。

6 おわりに

以上見てきたように、対照的なアラベラとスーのパーソナリティは、彼女たちの言葉の中に反映され、鮮鋭に浮き彫りされている。アラベラは、男に容認される言葉を使うことで、「下品さ」、「卑俗さ」が、また、「率直さ」と「強さ」が強調される。一方、「新しい女性」としての生き方を探索しながら、古い社会規範を打ち破ることのできないスーは、レディに期待される言葉を使うことで、上品さ、都会的雰囲気、知性が強調される。この意味で、ふたりに対比した言葉を使うハーディの語りの戦略は成功している。しかし、ハーディが使う言葉の背景には、たんに性差の範疇にとどまらず、階級、文化、職業、教育等の差異が重要な役割を果たしていることは言うまでもない。最後に、ふたりとも社会に容認される女性の役割から逸脱しているかのようだが、実際は因習に呪縛されていることを付け加えなければならない。アラベラは「上品ぶる」生き方を求め、男に依存し、スーは社会への反逆を悔い改め、フィロットソンのもとに戻る。この点に、「女はこうあるべき」という男の視点を払拭できないハーディの限界がある。それは、ジュード、フィロットソン、ギリングムのスーに対する呼びかけ語によって実証されているように、ヴィクトリア朝の抑圧された女性の解放を期待しながらも、伝統的な女性観をハーディは踏襲しているからである。

本論では、『日陰者ジュード』において対照的に描かれたスーとアラベラの言葉をとおして、ヴィクトリア朝の女性がいかに「レディらしい」言葉を使い、「レディらしく」振る舞わなければならなかったかを考察してきた。ハーディは語りの戦略として、アラベラには男の言葉を、スーには女の言葉を頻用して、ふたりの女性のパーソナリティの差異を鮮明にしている。しかし同時に、ハーディが、女性の解放を期待しながら、一方で男性主義的な言葉に女性を押し込めたことも忘れてはいけない。この意味で、ハーディは矛盾を抱えた世紀末の作家と言える。

注：引用の訳文はすべて、『日陰者ジュード』大澤衛訳（岩波書店、1977）を参照

した。

引用・参考文献

- Banks, J. A. and Olive. Feminism and Family Planning in Victorian England.
New York: Schocken, 1964.
- Hardy, Thomas. Jude the Obscure. London: Macmillan, 1974.
- 今井けい 『イギリス女性運動史』 東京：日本経済新聞社，1992.
- ジェニファー・コーツ 『女と男ことば』 吉田正次訳，東京：研究社，1990.
- Key, Ritchie Mary. Male/Female Language. Metuchen: Scarecrow Press, 1975.
- Kramer, Cheris. "Separate But Unequal." Barrie Thorne and Nancy Henley (eds),
Language and Sex: Difference and Dominance. Massachusetts: Newbury
House Publishers, 1975.
- Miller, Casey and Kate Swift. Words and Women. New York: Anchor Press, 1976.
- フィリップ・M・スミス 『言語・性・社会』 井上和子他訳，東京：大修館，1987.
- ロビン・レイコフ 『言語と性—英語における女の地位』 川瀬裕子、かつえ・
あきば・れいのるず訳，東京：有信堂高文社，1985.
- リチャード・A・スピアーズ編 『英語スラング辞典』 山田政美訳，東京：研究社，
1989.
- Spears, Richard A. ed. Slang and Euphemism. New York: Jonathan David
Publishers, 1981.
- スペンダー・D. 『ことばは男が支配する』 れいのるず=秋葉かつえ訳，
東京：勁草書房，1987.